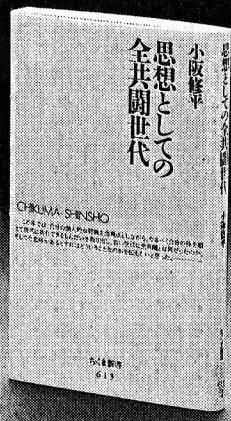


「思想としての全共闘世代」

小阪 修平著



七〇年代後半から八〇年代、大学で学生運動の真似事をした者らにとって、全共闘は亡霊のような存在だった。学内からはその残滓さえ消え去ろうとしていたが、ときおり思いもかけぬ場から遺物が掘り返され、厄介なテーマを突きつけてきた。関係本を読み漁っても、既に物語の中に収められた「読み物」は、現実という地点でリンクし合うポイントがどうしてもずれてしまう。況や、運動に興味のない一般学生はなおさらだったろう。

そんな中、まるで手漕ぎボートに乗るように霧を掻き分け、一人の全共闘オヤジが語りだした。しかも、これまでの追想やルポ的なものとは手法がまったく違う。感情をできるだけ排し、「思想」としての普遍性を探りつつ、運動から一步、距離を置いた場所から分析している。よって現在までをどう生きたかも重要な観点となり、十年ごとに区切って主

人生顧み運動の意味問う

▲ちくま新書・735円

だった社会事象と絡め伝えている。つまり、個人を出発点としながら、世代共有の問題をつかみとろうとする試みなのだ。

著者にとって全共闘運動は、向こうからやってきた嵐のようなものであり、運命的に人生の一部を「つかまれてしまった」対象だ。そこから学んだのは他者や自己と向き合う「態度(対面)」。そのものである。だからこそ、「対面」を重視してきた人生を語ることは運動の意味を問うことにもつながっていく。

また、多数の党派に分かれた一番の理由を方針でなく、感性の違いと断言する点や全共闘はそもそも実態のない個人の意志の磁場であった等、なるほどと頷くところも多い。

団塊の世代が続々と定年を迎える今、周囲にもちらほら一物ありそうな？初老の姿を見かけるようになった。もし次世代との会話がなされるとすれば、むしろこれからはないのか。シンパ(支持者)ぐらいの意味。シンパシーからきた言葉、というように平易な説明も随所にあって、当時をまったく知らない者も入っていける新しい形の現代史本だ。

評・宮本誠一(NPO夢屋プラネット代表)